

<p>研修成果の活用レポート/NITS 大賞エントリーシート</p> <p>※研修成果の活用レポートは、NITS 大賞エントリーシートと同様式です。NITS 大賞に応募される方は、推薦者への提出とは別に、<award@ml.nits.go.jp>宛て、メールにてお送りください。なお、メール送信後、3 日以上受領メールが届かない場合はご連絡ください。</p>	<p>※事務局記入欄</p> <p>受理No. : D-31</p>
<p>【学校名・氏名】福島県双葉郡楡葉町立楡葉北小学校・泉澤哲幸</p>	<p>【応募部門】</p>
<p>【修了研修名】平成30年度 第3回 中堅教員研修</p>	<p>校内研修プログラム開発・実践部門</p>
<p>【活動名】ICT 機器活用の促進～機器の導入時において～</p>	
<p>解決すべき課題：※活動を行う前に、どんな課題設定をしましたか？</p> <p>本校は、原発事故による全町避難及び学校のプレハブの仮設校舎での生活を経験し、平成29年度から楡葉町の校舎に戻って授業を再開した。児童数が激減する中、学校の特色を見出し、作り、それを学校の内外に発信することで、町の復興の一翼を担う必要がある。町も、「教育環境日本一」を掲げ、タブレット PC をはじめ、各種 ICT 機器の整備を行った。そこで、ICT 機器を、教職員の指導に生かすために、次の課題を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 教職員の ICT 機器に対する抵抗感を和らげること。 2 活用ありきではなく、普段の指導の悩みを機器によって解決すること。 3 ICT 機器の良さを知り、自ら使用方法を創造していくこと。 	
<p>目標・方針：※課題を解決するためにどんな目標や計画、戦略や方針をたてましたか？</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 機器の把握・操作スキルの向上～ICT 機器を使える教師から、ICT 機器で指導できる教師へ～講習会の実施、すぐに使用できる環境整備、ICT 支援員による操作サポート 2 普段の授業の悩みの把握と活用モデル授業の実施 現職教育の反省の活用、普段の学校生活の中での授業公開（ICT 機器の使い方の提案授業） 3 現職教育による教師一人ひとりが主体的な授業を実践～やられている感の低減～ 全体計画への位置づけ、1 授業 1 提案（自分の得意を生かす）、授業公開時期の弾力化 	
<p>活動内容：※何を行ったか、具体的に記載してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 機器の把握・操作スキルの向上 タブレット PC の使用ソフトを 1 つに絞り、年度当初に ICT 講習会を実施した。放課後の 1 時間を設定し、大まかな使用方法を 15 分程度で行い、残りは、参加者の興味・関心に応じて自由に使い、質疑・応答を行った。 授業だけでなく、空き時間や放課後にすぐに使えるように、教室の近くに保管庫を移動した。また、プリンターも準備し、必要に応じてすぐに印刷をできるようにした。 ICT 支援員の常駐化を町に要望する。それにより、授業における PC 操作を支援員に任せ、指導に集中できる環境を作りだそうと試みた。 2 普段の授業の悩みの把握と活用モデル授業の実施 これまでの現職教育での授業研究のまとめを振り返り、ICT 機器で解決できる事案はないか再検証した。その結果、授業中に写真や動画を撮影し、活用すること、発表ボードにノートを転記させる時間をなくしたいなどについて解決する方法を検討した。それを基に、簡略的な授業公開を行い、実際に授業を公開した。付箋に感想や質問を右のように記入していただき、ICT の使い方を中心として、指導における考えの交流を行った。 	

3 現職教育による教師一人ひとりが主体的な授業を実践
 現職教育の内容に ICT 機器の活用を取り入れた。必ず使うこととはしなかったが、使用を意識するように共通理解を図ってきた。
 また、学年 1 つの授業の提供については、これまで公開時期・学年をあらかじめ全体計画で決めていたが、研究主題を踏まえ、1 授業 1 提案ができるように、自分の授業内容（提案）を考え、それぞれの担当教師が公開時期を決めるように変更した。
 今年度の授業研の流れを作るために、私自身が 5 月末に第 1 回の授業研究を実施し、発表ボードとしてのタブレット使用と ICT 機器を利用した意見交換について提案した。



活動の成果：※それによって、どんな成果が得られましたか？

- 1 機器の把握・操作スキルの向上
講習会では、細部まで説明するのではなく、実際に使ってみる時間を多く取ったことで、授業をイメージしながらタブレットを操作することができた。ICT 支援員も常駐化され、使い方の相談や機器の不具合に迅速に対応できるようになった。
- 2 普段の授業の悩みの把握と活用モデル授業の実施
活用モデル授業の実施では、ICT 機器使用のねらいを明確にし、操作方法はできるだけ簡略化して公開した。児童の操作スキルを心配する教師もいたが、公開学年の 3 年生でも操作できると確認することができた。そのため、前向きに活用していこうという意識の高まりが見られた。ICT 使用についての意見は右の通りである。

子供たちの考えを（1つ）スクリーンで比較することにいろいろな考えがあることに気づけた。
 自分の考えをノートに書く書き始めている子が多かった。タブレット操作が意欲付けにつながっているためか。

3 現職教育による教師一人ひとりが主体的な授業を実践
 現職教育の取組の一つとして ICT を組み込んだ。また、授業を公開する教師が、授業で自分自身の提案を十分行うことができる内容と時期を選ぶことで、見通しを持って指導にあたるできるようになってきた。これまでの、「この時期の公開なら単元は…」という思考から「～について先生方の意見をもらいたいから、この時期・内容」という思考に変化させることができた。そのため、授業研究では、話し合いの視点がより明確になり、教師自身の課題の解決に向けて、ベテランの先生の指導方法のすばらしさを生かしながら、若い先生の新しい発想を取り入れた現職教育とすることができてきた。教師と児童間だけでなく、教師同士の指導観・指導方法の交流について ICT 機器を通じて深めることができた。ICT 機器を使えばいから、どのように使うかについて意識が向いてきた。
 普段の授業においても、タブレットの稼働率が上がってきた。

〈2年生生活科での活用〉
 町探検で写真撮影し、振り返りに生かします。

〈5年生国語科での活用〉
 話し合いのようすを動画で撮影します。撮影されている意識で、いつも以上に真剣です。

撮影した動画を見直して、良かったことや今後の課題について話し合い、授業のねらいに迫ります。

アピールポイント（アイデアや工夫）：
 職場の中堅世代として、先輩の先生の指導力と後輩の先生の意欲や新しい感性をつなぐために、ICT 機器を使った取組を行うことができた。周囲の大人（教師）を変えるには、まず自分自身の実践と結果が不可欠となってくる。さらに、ICT 機器によって、児童がより良く変容していくことを実証することによって、他の先生にも必要感が生まれてくる。ICT 機器の導入をこれから始める学校も多々あると思うので、その指針になればうれしく思う。